

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25360045

研究課題名(和文) 公民権運動におけるNCNWの役割～ドロシー・ハイトを中心に～

研究課題名(英文) Contributions of NCNW to the Civil Rights Movement ; Thinking of the leadership of Dorothy I. Height

研究代表者

西崎 緑 (Nishizaki, Midori)

島根大学・人間科学部・教授

研究者番号：00325432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：フリーダムサマーの激動の中でも、NCNWは、それまでと変わらずに黒人女性の置かれた現実に根差した活動を行った。Pig Bankに出資して、南部黒人女性の生活を支援したり、北部白人富裕層の女性に現実を見せるだけのWednesdays in Mississippiを行ったりして、ラディカルな運動からは距離を置いてきた。このことは、ドロシー・ハイトが全米YWCAを活用するなど、既存のやや保守的な組織との協調路線をとったことにも表れている。しかし公民権運動の進展には、YWCAを通しての地道な教育活動や、プールの人種隔離撤廃などの影響も少なくなく、女性たちの柔軟な思考と活動が貢献したと言えよう。

研究成果の概要(英文)：The National Council of Negro Women (NCNW) mostly kept their activities within a limit of supporting the Southern Black women's daily lives during the Freedom Summer. For example, they subsidized the Pig Bank as well as secretly implemented the Wednesdays in Mississippi, which brought the leading woman figures from the North and gave them the first-hand experiences in the Southern lives. Dorothy I. Height, the leader of NCNW at that time, intentionally used the YWCA of the U.S.A. as an instrument to educate all the women in the U.S. The YWCA published many pamphlets about the inter-racial relations and conducted inter-racial workshops in their local chapters. Not only that but also the YWCA integrated their swimming pool. These, rather conservative approaches, must be recognized as a part of the Civil Rights Movement since the women's collective actions pushed forward the Movement.

研究分野：社会福祉

キーワード：NCNW YWCA 公民権運動 保守的 ドロシー・ハイト

1. 研究開始当初の背景

国内における既存の黒人女性史研究は、19世紀末から20世紀前半における女性団体の組織化や(女性の)参政権獲得運動をとりあげたものが中心となってきた。つまり1950～60年代の公民権運動の高まりの中での女性の役割は、パークスやベイカーなどの伝説的な人物を除いて十分に明らかにされていなかった。

また公民権運動史における女性の役割については、個人や地方での出来事を中心にした研究(例えば、アラバマ州バーミングム)が主であり、黒人女性の全国団体に着目した公民権運動史は管見の限り見当たらなかった。

2. 研究の目的

本研究は、「アメリカ人」であるとともに「黒人」であり「女性」である黒人女性たちが、公民権運動の中で実現しようとした「市民的自由」とは何か、さらに彼女らの運動方針、運動方法には如何なる特色があったのかを明らかにすることを目的とした。

特に、全国レベルで組織されたさまざまな黒人女性組織の連合体である全国黒人女性会議(the National Council of Negro Women, NCNW)が1950年代後半から60年代前半の公民権運動の高揚の中で、如何なる主張をしてきたのか、会長のドロシー・ハイトとその周囲の人々の発言に注目しながら明らかにすることとした。

なお、この時期の公民権運動の中での黒人女性のリーダーシップとして注目されてきた学生非暴力調整委員会(SNCC)のエラ・ベイカーとの比較によるNCNWの相対的特徴を明らかにすることも目的の一つとして加えた。

3. 研究の方法

主として文献研究および史資料(第一次資料)によった。特に、ドロシー・ハイトの思想と活動、当時の黒人女性の置かれた立場や行動、NCNWの活動や意思決定過程の検証、他団体との連絡調整や組織的行動についての検証を行った。

(1)平成25年度には、国内で入手可能な文献・資料を調査し、ドロシー・ハイトの思想と活動、NCNWが直面していた課題の分析を行った。

(2)平成26年度には、NCNWの活動記録や意思決定過程を中心に、一次資料の調査を行った。ワシントンD.C.のMary McLeod Bethune Council Houseおよびメリーランド州内の文書館(National Archives for Black Women's History))に所蔵されているNCNWの議事録等の資料調査を行った。

(3)平成27年度には、マサチューセツ

州のSophia Smith Collections of Women's Historyに所蔵されているYWCA of the USA PapersおよびDorothy I. Height Papersの史資料(一次資料)調査を行った。

またその後平成28年2月には、1950年代にドロシー・ハイトが精力的に活動したニューヨーク市YWCA関連の史資料を調査するために、ニューヨーク市図書館本館およびSchomburg Center for Research in Black Cultureにおいて資料調査を行った。その機会にBlack Women's History Month行事に参加して、YWCAの人種問題への取組を学び、ハイトの側近であった人物へのインタビューも実施した。

(4)平成28年度には、日本西洋史学会(5月)およびアメリカ学会(6月)の学会発表を通して、研究成果の中間報告を行うとともに、他の研究者の意見を取り入れ、研究内容の補強に努めた。また、NCNWの隠れた活動と言われ、近年になってから注目されるようになったWednesdays in Mississippiのプロジェクトについての文献研究および一次資料精査を行った。

4. 研究成果

(1)ドロシー・ハイト(Dorothy I. Height)

ドロシー・ハイト(Dorothy I. Height)は、1912年3月24日ヴァージニア州リッチモンドに生まれた。彼女が4歳のとき、一家はペンシルヴァニア州ランキンに移住した。これは、第一次大戦時の好景気による「大移動」の波に乗った移住であり、ハイトの父親も北部でのより良い生活を夢見てランキンに移り住んだのであった。

ハイトが積極的に女性の社会活動に参加したのは、彼女の母親の影響が大きい。ハイトの母親は、1895年に創設されたペンシルヴァニア黒人女性クラブ連合会(Pennsylvania Federation of Colored Women's Clubs)の活動に熱心に参加しており、ハイトを州や全国の会合に伴うことが多かった。そこで彼女は、女性たちが自身たちで組織を運営し、自らが学習していく姿を見て学ぶこととなった。

ハイトがニューヨークで大学生活を送った時期は、ハーレム・ルネッサンスの時期であり、ニューヨークの黒人が自主独立で自分たちの文化を花開かせる時期であった。卒業後、ハイトは、貧困地区の住民のためのさまざまな仕事についていたが、23歳時に、ニューヨーク市福祉局のスーパーバイザーとして雇用された。1937年、25歳になったハイトは、YWCAに職を得ることとなった。この仕事によって、ハイトはNCNWとのかかわりに進むこととなる。

ハイトがハーレムYWCAで働き始めてから1か月後の1937年11月7日、ベシューンがNCNWの会合を開くこととなった。YWCAの新米スタッフの役割として、ハイトは大統領夫人の工

レノア・ローズヴェルトをエスコートすることとなった。そこで彼女は、NCNW 創設者メアリ・マクロード・ベシューンと運命的な出会いをする。このとき、ベシューンは、ハイトを後の後継者にすべく NCNW のメンバーとして迎え入れることに決めたのであった。以後、ハイトは YWCA の仕事をつづけながら、NCNW のベシューンのサークルのメンバーとして学んでいくこととなる。1938 年、エレノア・ローズヴェルトが、青年国際会議をヴァッサー女子大で開催することになったとき、ハイトは 10 人の準備委員会の一人として指名され、54 か国から 600 人の若者を集め、人種、宗教、信条にかかわらず交流する企画を実行した。これらの経験を通して、彼女はエレノア・ローズヴェルトやベシューンの友情や、人種差別の克服への努力を学んでいった。

1946 年、YWCA は、アトランティック・シティで第 17 回全国大会を開催した。この大会で YWCA は、人種統合憲章を決議し、白人組織の中央と黒人組織の支部に分かれていた全国各地の YWCA の統合を図ることとなった。このときハイトは、YWCA の人種統合教育事務局長の任にあり、各地を訪問して人種統合憲章の実施を理事会と協議したが、南部の YWCA においては、特に困難を経験した。それは、ハイトが黒人であったからである。

1950 年代の公民権運動が暴力的抵抗を受ける中、タコニック財団のステイブン・キュリーによって、黒人指導者たちが集められ、ハイトは、唯一の女性として参加した。そして、この集まりを通して、ハイトは後の活動の片腕となる、ニューヨークの子どものための市民委員会のポリリー・コーワン (Polly Cowan) と知り合うこととなった。

(2) ワシントン大行進の組織化と女性の排除、そしてミシシッピへ

1963 年 8 月 28 日 A. フィリップ・ランドルフにとっては 2 度目、他のリーダーにとっては初めてのワシントン大行進が組織された。これは、リンカーン大統領が奴隷解放宣言をしてから 100 周年を記念するとともに、連邦政府に対して (新) 公民権法の制定を訴えかけ、黒人に経済的機会を与えるように世間に訴えることを意図したものであった。大行進の組織化には、NCNW をはじめとして黒人女性たちが大いに協力したにもかかわらず、リンカーン記念館前で演説を行うことができたのは、男性リーダーのみであった。女性に申し訳程度に与えられた機会は、マヘリア・ジャクソンによる国歌だけだった。大行進への女性たちの貢献が報いられなかったことに納得できなかったハイトと NCNW 会員たちは、大行進の主催者側が、25 万人の聴衆への暴力を恐れ、集会後はただちに解散して静かに家路につくように指示を出していたにもかかわらず、翌 29 日に、ショーラム・ホテルにて「大行進の後は何? (After the March-What?)」をテーマとした集会を開催し

た。その中で、公民権の実現と同様に、黒人女性の日々の生活では、住宅問題、児童の養育、学校教育、就労などが喫緊に解決を要する重要な課題であることが確認された (Height 2003: 146)。

この集会の参加者の一人に、アラバマ州セルマで選挙の自由 (Freedom to Vote) プロジェクトに携わっていた、SNCC のプラセア・ホール (Prathia Hall) がいた。ホールは、この活動に参加した 8 歳から 16 歳までの 300 人の子どもたちが、留置場に入れられ、暴力的かつ非人間的扱いを受けていることを訴えた。留置場は異常に混んでいて、子どもたちは座ることも横になることもできない、それに食糧は大工が使うのこぎりで切られ、コーヒーには塩が入れられている、その上、少女たちは性的虐待の可能性を示唆されて怯えていることを訴えたのである。ホールは、NCNW の女性たちがセルマに来てくれれば、このような虐待の現状を把握してもらうことができると言うのであった。

これに対して、ハイトは即座に、NCNW は情報収集と、子どもたちが置かれた状況の評価するために、セルマを訪れるべきであると決断した。そのため、白人 2 名と黒人 2 名の混成チームを派遣することになった。白人のほうは、ポリリー・コーワンとシャーリー・スミス、黒人のほうは、ドロシー・フェレビー (NCNW 第 2 代会長) とドロシー・ハイトが選ばれた。チームは、10 月 4 日、セルマに入ったが、南部で行動することを念頭において、身の安全を確保するため、人種別に分かれて車に乗り込むことにした。しかし黒人が乗車するはずだった車が到着しなかったため、彼女らは白人 2 人が運転する車に乗ることになった。これは、南部では全く考えられないことである。その上、コーワンとスミスは、黒人のチームメンバーを下ろしたらそのまま去る予定であったが、留置場から帰還した若者たちが何を話すのか、どうしても聞きたいと思い、黒人メンバーとともに教会に入ってしまった。この集会の進行を担っていた SNCC のジェームズ・フォアマンは、ハイトとフェレビーだけではなく、白人メンバーにも登壇を進め、一言話すように促すと、(スミスは断ったが) コーワンはそれに応えてしまった。このことが後にセルマの白人女性からの信用を失わせ、NCNW の活動をそれ以上展開できなくさせるのであった (Harwell 2014: 36-37)。

この夜、ハイト、フェレビー、コーワン、スミスは、およそ 65 人の生徒たちと数人の母親たちにインタビューを行った。4 人は、彼らから直接聞いた話を通して SNCC のプラセア・ホールが訴えたことはまさに本当のことであったと確認した。特に、少女たちが、「もし、おとなしくしなければ、男の逮捕者を同じ牢屋に入れるぞ」と警察官から脅され、同房の女子でかたまって寝た、ということも聞くことができたのは、大きな収穫であった。

翌日、コーワンとスミスの白人2人組は、アラバマ州議会議員の娘のローザ・ジョイスとセルマのチャーチ通りメソジスト教会牧師の娘キャサリン・“キャティ”・コースランと面会した。両名とも、セルマの状況についての不安を述べていたが、留置場に入れられた子どもたちのことに対しては、特に同情を寄せてはいなかった。その次の日にジョイスとコースランは、アトランタのFellowship of Concerned 設立者のドロシー・ティリー (Dorothy Tilly) を空港で待ち受け、彼女の話の聞きはしなかったが、それは結局実現できなかった。なぜなら、コーワンとスミスが黒人生徒たちの帰還歓迎集會に参加したことが、地元の新聞に悪意ある記事で掲載されてしまったからである。迎えがなかったティリーが不審に思ってコースランに電話すると、2人に「裏切られた」とも言っていた。

この失敗から、ハイトとコーワンは、南部の白人と黒人が協力できる関係を NCNW が橋渡しするためには、どちらの立場や気持ちにも敏感になり、配慮をすることが重要であると学んだ。そしてこの敵意に満ちた地域に入っていくには、目立たず、静かに、匿名性を持つことが大切であると思ったのであった (Height 2003: 162)。

1964年3月、5つの女性団体、NCNW、YWCA、the National Council of Catholic Women (NCCW)、the National Council of Jewish Women (NCJW)、Church Women United は、密かにアトランタで会合を持った。この会合に先立って、それぞれの組織から、南部の7つの都市のリーダーを呼び集め、各自が経験している状況を語りあうこととした。7つの都市は、ジョージア州から2つ(アトランタとオルバニー)、アラバマ州から2つ(モンゴメリーとセルマ)、サウスカロライナ州のチャールストン、ヴァージニア州ダンヴィル、ミシシッピ州ジャクソンであった。集まった黒人と白人の女性たちは、同じ町に住んでいてもお互いをあまりにも知らなかったことを自覚し、困難が予想される相互理解に向けて動きだすこととした。彼女らは、公民権運動とのかかわりを疑われないように、この集まりを Women's Inter-organizational Committee (WIC) と名付けることとした。

事態は、急を要していた。1964年夏、ミシシッピでは、SNCC がフリーダム・サマー・プロジェクトとして大規模な有権者登録活動を企画しており、識字テストのための Freedom School も、各地に開設されてきていた。そこで、WIC 参加者の一人、クラレ・コリンズ・ハーヴェイ (Clarie Collins Harvey) が、ミシシッピ州都ジャクソンに女性たちの訪問を行ってほしいという要請をしてきた。そこから、Wednesdays in Mississippi のプロジェクトが開始されることになる。

(3) 大人の女性ならではの活動 ; Wednesdays in Mississippi

黒人女性と白人女性の間大きく深い溝を埋め、両者のコミュニケーションを進める切掛けを作ることが、このプロジェクトの主たる目的であった。ハイトとコーワンは、その一方でフリーダム・サマーに参加する学生たちの安全にも気を配る必要があると感じていた。1964年ボブ・モーゼスが率いる COFO (Council of Federated Organizations = 連合組織協議会)、SNCC のジェームズ・フォアマンが中心となって、北部から多数の学生たちを呼びよせる計画を立てていたからである。

ミシシッピ州の白人たちは、これをミシシッピの南部らしい平和な生活を乱す(共産主義に毒された北部の学生たちによる)「侵略」として警戒し、武装をして迎え撃つだけでなく、州法を次々に作り、あらゆる集会や講演を違法とすることとした。このような状況の中、特に対話の素地を作ることが困難であるのは、南部の白人女性たちが「夫から離婚されること」や、「夫が仕事を失うこと」や、「家族が危険にさらされること」や、「村八分にされること」を恐れて、北部からの訪問者に会うこと自体に二の足を踏むことであった (Harwell 2014: 47)。

コーワンは、熟考の末、中高年の社会的地位の高い女性たちを派遣することを企画し、「侵略者」と位置付けられる北部の若い学生たちとは、一線を画する女性たちを送りこむこととした。専門職として管理職の地位にある女性や、社交的な組織を率いる女性たちが醸し出す雰囲気は、南部の貴族的社会の住民にも受け入れやすいものであり、南部の地方組織に所属する白人女性であれば、全国組織のトップと会える機会を逃したくないと思うにちがいないと考えられたからである。

南部の白人女性たちの都合や、北部の訪問者の都合を考えると、週末は家族や教会のために働かなければならなかったので、プロジェクトの実施は、火曜日に各都市から飛行機でジャクソンに入り、木曜日にジャクソンから帰るということになった。このため、プロジェクトは、Wednesdays in Mississippi (WIMS) と名付けられた (Height : 168)。

主催者の NCNW のほかに、協力団体は、YWCA、教会女性連合 (United Church Women)、全国カトリック女性会議 (the National Council of Catholic Women)、全国ユダヤ女性会議 (the National Council of Jewish Women)、女性有権者連盟 (the League of Women Voters)、アメリカ大学女性協会 (the American Association of University Women) であった。これらの団体は、資金協力、ボランティア協力のほかに、各団体の地方組織を通じて現地の協力者を募ることに協力した。ハイト個人の外交手腕のほかに、NCNW が黒人女性の全国組織として、普段から他の女性団体の全国組織と交流していたからこそ、このような連携がスムーズに行えたのだと考えられる。

この連携は、訪問者を世話するスタッフの安全確保のためにも必要であった。白人と黒人をチームで送り込む WIMS の運営には、白人と黒人のスタッフをそれぞれ現地に駐在させる必要があり、白人スタッフとしては、スタンフォード大学を卒業して 1963 年から NCNW に勤務し始めた、スーザン・グッドウィリー (Susan GoodWillie) と彼女の大学時代のルームメイト、ダイアン・ヴァイヴェル (Dian Vivel) が選ばれた。黒人スタッフとしては、年上のドリス・ウィルソン (Doris Wilson) が選ばれた。ウィルソンは、タスキギ学院の出身で、ユニオン神学校で神学を修めた後、クリーブランドのウェスタン・リザーブ大学で行政学の修士号を得た。その後、エписコパル教会 (= アメリカ聖公会) の Girls' Friendly Society や、YWCA の学生委員会での仕事に就いてきた。これらの社会経験と、南部と北部のどちらの地域でも生活した経験が買われ、ミシシッピの住民とも、訪れる北部の両方とコミュニケーションが可能な人物として、現地スタッフを束ねる役割を任されることになった。ウィルソンは、黒人家庭にホームステイすることになったが、白人スタッフの居場所を見つけることが困難であった。白人市民会議の関係者が所有するマグノリア・タワーがグッドウィリーとヴァイヴェルの宿泊場所となり、その費用は NCNW が負担することとなった。

危険な時期であるが故に、NCNW は、最大限の注意を払って、プロジェクト参加者の安全確保の方策を立てて協力を依頼した。まず、現地入りするスタッフには、司法省、米国自由人協会 (American Civil Liberties Union)、公民権法制化のための弁護士委員会 (the Lawyers' Committee for Civil Rights Under Law) 等からオリエンテーションを受けた。その後、WIMS の計画進行過程では、ジョンソン大統領、ロバート・ケネディ司法長官、ミシシッピ州知事のポール・B・ジョンソンに直接手紙で報告する手はずを整えた。また、ジャクソン駐在の司法省職員ジョン・ドア (John Doar) とは、毎週連絡を取り合うこととなった。このように、NCNW がベシューンの時代から築き上げた大統領や連邦政府の高官との密接な関係が、WIMS プロジェクトを実施できた理由にもなっている。

WIMS は、7 チームの編成で、48 人の女性 (内訳は、白人 32 名、黒人 16 名、プロテスタント 32 名、ユダヤ教徒 8 名、カトリック 6 名、不明 2 名、大卒者 40 名のうち修士号取得者 10 名、博士号取得者 5 名であった。) 地域的に見れば、中西部のイリノイ州、ミネソタ州、東部のマサチューセッツ州、ニューヨーク州、ニュージャージー州、ペンシルヴァニア州、メリーランド州、ワシントン D.C. で普段活動していた者たちであった。

WIMS に参加した女性たちの動機は様々であり、例えば、ポーリー・コーワン、アリス・ライアソン、ヘンリエッタ・モア、ジーン・

デイヴィスの 4 人は、自分の子どもたちがフリーダム・サマーのボランティアとして参加しており、子どもたちを見守るという目的も持って参加していた。ミリアム・デイヴィスとメアリ・クッシング・ナイルズは、親族が南部にあり、南部の状況を確認めたいと思っていた。ジェラルディン・コーレンバーグは、プリンモア大学時代の親友のアリス・ライアソンから誘われて参加することにした。クローディア・ヘクシャーとシルヴィア・ワインバーグは、父親が社会活動に熱心であったこと (おそらくユダヤ教の伝統として寡婦と子どもを助けるという文化の中で育ったことから) 参加を決めていた。プリスキラ・ハントの父親は合衆国で黒人と白人の共学を早くから実施していたオペリン大学の学長であったし、マーガレット・ローチは、パチカンの回勅の影響を受けていた。

WIMS に参加した女性たちは、南部の社会状況や慣習を十分に知らなかった、ということ、このプロジェクトが特別に秘密裡に行わなければならない事情を抱えていたため、出発前に事前オリエンテーションが行われ、注意点が配布された。もし彼女たちの本当の目的が公表されたなら、後続の女性たちや現地スタッフ、さらにミシシッピ州の住民で WIMS の女性たちに協力した者たちが暴力の対象となり、生命や財産の危険にさらされる恐れがあった。慎重の上に慎重を重ねなければならない、ということは、コーワンとハイトがセルマの失敗から学んでいたことであった。

WIMS を通して、チームの女性たちは、北部との違いをその目で見ることになったが、特に印象に残ったことは、深南部においては、黒人女性よりもむしろ白人女性のほうが助けを必要としている、ということであった (Harwell 2010: 639)。確かに、黒人女性は、経済的に苦境に立たされていたが、彼女たちは助け合うことができた。しかし白人女性たちは、経済的豊かさを享受していても、孤独と不安に満ちた生活をしてきた。ひとたび、彼女たちが南部で半世紀以上にわたって続けられてきた人種隔離の慣習に抗おうとすれば、夫が仕事を失うことになるかも知れない、夫から離婚されるかも知れない、コミュニティの女性サークルから孤立するかも知れない、ということ常を常に心配しなければならないのであった。一般の白人女性は、自由に発言することなど許されていなかったのである。

このような恐怖は、1950 年代の冷戦や赤狩りの恐怖の影響も残っていた。アメリカ社会が秩序を失っていくことを、共産主義者や公民権運動のせいにするのは、彼女たちがアクセスできる情報が偏っていたからであった。ミシシッピにおいては、新聞やラジオなどのメディアは、人種隔離主義者に牛耳られており、北部で報道されているような情報は女性たちの耳に入っていなかったのである。

「北からの侵略」は、「共産主義者の謀略」

と同様にとらえられ、外部からくる誰にでも、猜疑心を抱くという状況にあった白人女性たちにとって、WIMSの女性たちの出現は、ある意味、安心を与えた。WIMSの女性たちは、「白い手袋」に代表されるように、(薄汚れた服装のヒッピーに見える SNCCの学生たちとは異なり)自分たちと同じ「主婦」であり、女性としての常識やマナーを身に着けた人として、一定の信頼を寄せることができたのである。このため、1964年夏のWIMSも、チーム6や7になると、白人家庭でのコーヒーに招待されることも出てきた。

一方、黒人女性たちにとっては、WIMSの黒人女性たちとの出会いは、ロールモデルとしての希望を抱かせるものであった。WIMSの訪問者は、同じ黒人でありながら、会社の経営者や重役、それにさまざまな組織の全国規模の代表であり、生活費の心配をすることもなく、自分の考えで行動することができる人々であった。人種隔離の社会しか知らず、劣等人種と位置付けられた生活しか知らなかった女性たちにとって、リーダーシップを発揮しているWIMSの女性たちは、新鮮であこがれの対象に映ったであろう。

ハイトとコーワンは、ひと夏だけでWIMSを終了させる予定であった。しかし1965年の夏、再びミシシッピ州にチームを送り込むこととした。

1966年になると、NCNWはこのプロジェクトを、地域の女性たちの必要を基礎に組み換え、Workshops in Mississippiとして、具体的な生活支援プログラムに変更していった(Harwell 2010: 653)。これらの事業は、早期教育(Head Start)、教師教育(Teacher's education)、学校における人種統合(school desegregation)、職業訓練(job training)、読み方矯正(remedial reading)、医療(medical care)、学校給食(school meals)などであった。1968年ころには、NCNWは、ファニー・ルー・ヘイマーの要請に従って、フリーダム・ファームに植える種を送ったり、豚銀行(Pig Bank)の元手を支援したりするなど、黒人たちが経済的自立を果たせるような手助けに重点を移すようになっていく。

中間的まとめ

NCNWの活動の手法として、伝統的にとられてきたのは、人種間の「協力」関係を築くことであり、決して「対立」や黒人のアメリカ社会からの独立を目指したものではなかった。その意味では、公民権運動期においては、きわめて保守的な活動を展開したと言ってもよい。

しかし、南部から脱出せずに居続ける黒人への支援は、ラディカルな手法のみでは実現できなかったであろう。フリーダム・サマーの激動の中で、あえて保守的な手法で扉をあげようとするNCNWの活動は、秘密裡に行われてきたため、近年まで知られることがなかった。Harwellの研究を通して、その実像が

明らかになり、現在では映画やドキュメンタリー、オーラルヒストリーなどで知られるようになった。

ただ、ここでジェンダーの問題として触れておかなければならないのは、黒人男性の存在である。南部の人種隔離制度の中で、黒人男性は、男性性を発揮することができなかった。それは白人女性へのレイプ疑惑が常に掻き立てられたからである。白人の優位性を脅かす黒人男性は、このレイプ疑惑や生意気な黒人、自分の場所をわきまえない黒人として、制裁の対象となった。リンチなどの直接的暴力が加えられることもあったが、それよりもふつうに行われたのは、失業や廃業に追い込む経済的制裁であった。

したがって、公民権運動の中で、アメリカ社会のふつうの市民としての市民権、自由権を獲得しようとした黒人指導者層が目指したのは、黒人家庭や黒人組織における男性性の回復であった。この入り組んだ構造が、黒人女性の存在を貶め、ガラスの天井を破ろうとすることを求める白人女性のフェミニズムとは異なる動きをせざるをえなかったのである。

黒人女性に課せられたジェンダー・バイアスを克服する課題は、人種平等を達成しつつ如何に、男女間の平等を達成するのか、という課題であった。NCNWがこの時期、やや保守的なアプローチを試みたのは、この迷路を生き抜くための可能性、突破口をそこに見いだしたからに他ならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕

西崎緑 研究実績報告書『公民権運動におけるNCNWの役割～ドロシー・ハイトを中心に～』2018年3月

〔学会発表〕(計2件)

西崎緑 『公民権運動におけるNCNWの役割』ポスターセッション
第66回日本西洋史学会大会(於慶應義塾大学)2016年5月21日、22日

西崎緑 『公民権運動におけるYWCAの役割 YWCA of the USA Papersに残された記録を通して』アメリカ学会第50回年次大会(於東京女子大学)2016年6月4日

6. 研究組織

(1)研究代表者

西崎 緑(NISHIZAKI, Midori)

島根大学・人間科学部・教授

研究者番号: 00325432

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし